

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 7 月 31 日現在

機関番号：31604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25580021

研究課題名(和文)近代日本における優生学受容の思想的背景と優生学の重点化・優位化に関する研究

研究課題名(英文)The study of adoption processes of Eugenics in modern Japan

研究代表者

本多 創史 (SOSHI, HONDA)

東日本国際大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：40528361

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀末から20世紀初頭のドイツやアメリカでは優生断種手術が積極的に実施されたのに対してイギリスではさほど活発ではなかったのはなぜかが明らかになった。また、同時期の日本で発行された諸雑誌(『優生』『優生学』『人性』など)を検討した結果、イギリスの優生学よりもドイツ系の優生学と断種手術の紹介記事のほうが多数であることがわかった。これらのことが1930年代以降日本の断種法制定に至る背景をなしていると推測できた。

また、優生断種手術に批判的であった医学者・木田文夫について調査した。その結果、彼がドイツ系の遺伝子決定論に懐疑的であったためであることが判明した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to reveal the reason why a considerable number of eugenic sterilization surgeries were enforced in America and Germany during between the end of 19th and 20th, while not much in England.

Second purpose is to reveal whether Japanese eugenicists were influenced by American and German eugenicist's thoughts or English. As a result of examining documentary records published in Japan, it is inferred the former. Third purpose is to investigate why Dr. KIDA FUMIO was skeptical to effects of eugenic sterilization surgery. It is verified that since he was influenced by developmental biology he couldn't believe effects of surgery based on genetic determinism.

研究分野：社会思想史

キーワード：思想史 優生学 近代日本

## 1. 研究開始当初の背景

(1)近代日本の優生学史研究は鈴木善次『日本の優生学』(1983年)にはじまると言ってもよい。90年代には科学史、教育史、社会福祉史、近代史などの領域で研究がおこなわれ、2000年代以降は社会学者や障害学者による研究も目立ってきた。

(2)それらの研究は法制度史や運動史が中心であり、あるいは教育者や社会福祉事業者による優生思想の受容についての歴史研究などが多かった。また社会学や障害学に立脚した研究は、身体への暴力的介入について批判的に検討するものが多い。

(3)これらの研究を通覧して気がつくことは、同時代の文学、政治思想、経済思想などを再検討しつつ、優生思想や遺伝学がそれらとどのような関係にあったのか、あるとすれば優生学や遺伝学の受容と普及にどのように働いたのか、などについての研究が不足しているということである。また、日露戦争や第一次世界大戦、大正デモクラシーや関東大震災などといった社会事件・状況と優生思想の普及との関係についても検討が不足していた。換言すれば、優生学および遺伝学などが日本社会に広く受容されることについての社会思想史的研究があまりないということである。

(4)そこで本研究では、大正教養主義と言われる文学作品を再検討して優生学受容の背景になっているのか否かを検討すること、また明治後期から大正期にかけての政治思想や経済思想などについて再検討し、それらが優生学や遺伝学の受容と普及にどのように関わっているのかを調査することとした。さらに西欧諸国のどのタイプの優生学や遺伝学を主として参照したのか、なぜそれを参照したのかなどについてもあきらかにしたい。

## 2. 研究の目的

(1)優生学は単独でというよりも衛生学の一分野もしくは遺伝学の応用領域として輸入された。西欧の影響もあって、日本では1910年~20年代は社会衛生学という名称で輸入され、その一部分に優生学があった。その後、30年代以降は民族衛生学と名称を変えたがそれは単なる名称変更ではなく内容の変更も伴っていたのであり、その中で優生学がどのように位置づけられるようになるのかをあきらかにする。また30年代から40年代以降は公衆衛生学となるが、同様に、優生学がどのような意義を付与されていたのかをあきらかにする。

(2)大正教養主義の言説構造をあきらかにするために、阿部次郎、和辻哲郎、倉田百三などの著作を入手する。特に倉田百三については、以下に述べる古屋芳雄と親しく、主たる考察対象とする。

(3)民族衛生学会の理事であり、国立公衆

衛生院院長を務めた古屋芳雄の思想と行動について明らかにする。古屋は大正時代、岩波書店などから文学作品を出版し、白樺派の作家として活躍していた。この文学者として活躍した時期、彼はどのような思想を持っていたのかをあきらかにする。また、昭和初期に文学の道を断念し、民族衛生学者として再出発するのであるが、彼はそれでも初期の文学者時代と同様の神への認識、自然観などを保持していたのかどうか、あるいは断絶していたのかをあきらかにする。そしてそのことと優生学へのコミットメントはどのように関係しているのかを検討する。

(4)1930年代から40年代にかけて日本のアカデミック空間で、優生学や優生思想がどのような領域にまで広がったのかを明らかにする。とくに刑法学者や社会福祉学者について検討する。

(5)優生学者の中には、永井潜や古屋芳雄などの主流派に批判的な学者もいた。それらの人々はどのような論理に基づいて批判を展開したのか、その帰結はどのようなものであったのか、などをあきらかにする。

## 3. 研究の方法

(1)主として『横手社会衛生叢書』、福原義柄『社会衛生学』、暉峻義等『社会衛生学』などの文献、『民族衛生』『公衆衛生』などの雑誌資料などにより質的・量的調査をおこなう。

(2)古屋芳雄の諸文献(上に記したように、衛生学関係のみならず文学作品も含む)を精査する。またご遺族から聞き取り調査をおこなう。古屋の人柄を含めて思惟様式の特質を明らかにする。

(3)刑法学者・小野清一郎と社会福祉学者・竹内愛二を取り上げて、文献収集を基に専門家としてどのような見地から優生学(もしくは断種手術)を肯定あるいは容認したのかを思想内在的にあきらかにする。

(4)木田文夫の遺族から聞き取り調査をおこなうと同時に、生まれ故郷である岡山県旧勝山町にて聞き取り調査をおこなう。

## 4. 研究成果

(1)社会衛生学から民族衛生学の段階になると優生学が重点化されることが判明した。またその後、公衆衛生学の段階になると再び衛生学の一分野に収まることが明らかになった。

(2)衛生学の一分野としてもしくは遺伝学の応用版として優生学は輸入されてくる。そこで、西欧における遺伝学の発達史、とりわけ遺伝子説がどのように広がり受容されたのか、そして優生断種手術の理論的支えになったのかなどを研究した。まだ論文の形にはまとめきれないが、イギリス、アメリカ、ドイツの事例研究から貴重な知見を得るこ

とができた。

(3) 思想状況や社会状況について明らかにするべく大正生命主義や大正教養主義について二次文献を整理した。このことによって全体の流れを把握することができた。

(4) 古屋芳雄の文学者時代の全作品を読み、その特質を明らかにすることができた。また古屋のご遺族から資料の提供を受けることができ、極めて簡略ながらインタビューをおこなうこともできた。

(5) 社会福祉学者・竹内愛二について、資料を収集して彼の社会福祉学の特質について明らかにすると同時に、優生的断種手術を彼が容認していく過程を内在的に明らかにすることができた。これは論文としてまとめて『社会事業史研究』44号(査読付)に掲載した。

(6) 優生学の受容に焦点をあててきたが、優生学に対して批判的な立場をとる学者をとりあげることも必要である。そこで、生物学者・故中村禎里氏の諸文献を読んだり、生物学史分科会に出席したりして情報を集めた。その結果、木田文夫という医学者の存在が浮かび上がってきた。木田は明確に優生学に反対したわけではないものの、その文字資料を丹念に読めば反対論として解釈可能な内容も含まれていることが判明した。これについては、一橋大学大学院において二年に分けて、講義した(2015・16年度、寄附講座講義)。

(7) 木田文夫の生まれ故郷である勝山町(現在の真庭市)や岡山県庁の協力のもと、木田の個人史研究をおこなった。さらにご遺族から貴重な資料を閲覧させていただくことができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

本多創史、「厚生事業への合流および断種(優生思想)の受容の一局面 戦時期竹内愛二のケースワーク論」、『社会事業史研究』44号、査読有、pp109-126、2012年9月。

本多創史、「カール・ピアソン「ダーウィニズム、医療の発達、そして優生学(医学専門家への講演)」、『東日本国際大学福祉環境学部紀要第10号、査読有、pp79-90、2013年3月。

本多創史、「東日本大震災と福島第一原子力発電所事故による被災者への役割 - ソーシ

ヤル・ワーカーの増員の必要性およびその活躍の期待」、『社会事業史研究』50号、pp113-124、2016年9月。

〔学会発表〕(計 2 件)

本多創史、高橋準、公開シンポジウム:「危機」の身体—クィア、ディスアビリティと「3.11」以降の日本、主催:科研費研究プロジェクト「『国家的危機』における身体の柔軟性と選別に関する分析:3.11後のナショナリズム」、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属共生のための国際哲学研究センター(UTCP)、東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター、2013年6月。

本多創史、「災害支援における社会福祉実践の歴史的役割」の中の「東日本大震災と福島第一原子力発電所での役割」社会事業史学会第44回大会、2016年5月。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等  
とくにありません。

6. 研究組織  
(1) 研究代表者

本多創史 (HONDA, soshi)  
東日本国際大学・健康福祉学部・教授  
研究者番号：40528361

(2)研究分担者  
( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：

(4)研究協力者  
( )